

特集 平壤と北京の「その日」はいつか

起こりうる混乱が過小評価されている

高坂 昨年八月のモスクワ政変で、ヨーロッパにおける「社会主義の時代」は終わりを告げたわけですね。そうになると、アジアの社会主義国家、中国、北朝鮮、ベトナムはどうなっていくのか、北京、平壤、あるいはハノイに「その日」は来るのか、というテーマは知的にいつでも興味深い問題です。

もともと、一口に社会主義国家といっても、いま挙げた三国では非常な違いがある。むかしながらの社会主義体制を堅持している北朝鮮、経済はそうとう自由化しているけれども政治面では不変の中国、そしてベトナムは政治・経済ともに大きく変貌している。その意味では三つを同列にならべるわけにはいかないのですけれども、ともかくいつまで、これらの国で社会主義体制が続くのかという問題がある。東欧で改

革がはじまったところに、一部の人が「社会主義の改革はいったん始まったら、途中では止まらない、体制が潰れるまで行く」と主張しましたね。例の2論文などがそうですが、はたして的中するかどうか。

しかし一方で、ソ連・東欧で起こったことが、アジアでも起こるとすると、これは大変な混乱が起こるでしょう。それも問題の一つですね。

小此木 そうなんです。われわれの近隣で体制移行という先行き不透明な実験がはじまっているにもかかわらず、国内では他人事のようにとらえている傾向がありますね。これらの国がこの不確実な実験に失敗するとなると、そこで生じる混乱は通常考えられているよりも大きいと思うのです。

たとえば、近い将来に北朝鮮の政権が崩壊すると想定してみましよう。そうなると韓国はいやおうなしに北朝鮮を吸収統合せざるをえなくなる。形態からいえばドイツ統一と同じ

●座談会●

回避できるか 最も危険なシナリオ

中国も冷淡だ。

八方塞がりの金正日は死中に活を求めて再度南進を決意する。折から飢えた民衆の食糧暴動が各地に自然発生、国家存亡の危機に直面した軍の若手将校団が決起、金正日の親衛隊や軍首脳部に忠実な部隊と平壤で市街戦を展開する。武力衝突は暴徒を巻き込んで各地に波及、全土は騒乱状態に陥る。難民が大挙して南に流れ出し、境界線一帯の治安に不安を覚えたソウルは「治安出動」と称して、開城など南に近い要衝に進駐、北朝鮮軍の将兵の多くがこれに投降する。韓国軍は寧辺の核施設も破壊する。在韓・在日米軍も戒厳勢に入る。

辛うじてクーデターの虎口を逃れた金正日は北京に亡命、中南海に朝鮮出兵を要請する。北京指導部は激論の末、これまた、国境地帯の「治安維持」のためと称して再び鴨緑江の向こうに派兵、平壤に迫る。中国軍と韓国軍に挟まれたクーデター軍は戦闘を停止し、残存政府代表は国連に介入を要請する。国

連の仲介の下に韓中両軍代表と北朝鮮の政治家・軍人から成る「臨時政府」代表が事後処理会談を始めるが、朝鮮戦争のときと違って、中国は韓国と国連に極めて協力的で、クーデター事件を機に朝鮮半島の平和統一の機運は一気に高まった。

しかし、このときの朝鮮派兵と事後処理をめぐって、北京指

シナリオ3（両者がほぼ同時に死去した場合）

中朝両国内の情勢はシナリオ1、2の前半にそれぞれ述べたように展開する。

問題は後半の部分である。

天下大乱に突入した中国には、北朝鮮にかまっている余裕はない。金正日は北京に亡命するのを諦め、国内に踏みとどまってクーデター派と死ぬまで戦うか、せいぜい中国東北の瀋陽か吉林に逃れて、地元軍司令の食客に甘んずるしかない。瀋陽軍区司令も鴨緑江の向こうの動乱や韓国軍の北上は大いに気に懸かるところだが、まず足元を

導部内に対立が起る。出兵のイニシアチブを執ったのは楊兄弟だが、派遣軍の指揮を執ったのは秦基偉国防相。平壤会談中、鄧小平死去の報に接した秦將軍は会談を副司令に任せ、急遽、派遣軍主力を率いて北京に凱旋、北京を固める楊兄弟の軍隊と対決するに至る。以下の展開はシナリオ1と同様である。

シナリオ3（両者がほぼ同時に死去した場合）

固め、好機至れば北京に進軍する計画を優先させなければなら

ない。結局のところ、中国は韓国が北を統一するのを手を拱いて見ているほかない。韓国の武力北進に対して米国並びに国連ができるだけブレーキをかけるよう働きかけたいのはやまやまだが、中央政府が崩壊し、権力に空白を生じた北京にはそれすらもできない。なにしろ台湾の国民党軍がついに「光復」のときが来たとばかり対岸の福建省沿岸に上陸、地元民の熱烈歓迎を受け、北京と社会主義に反旗を翻

した広州軍と呼応して「北伐」を開始する有り様だからである。

いずれにせよ、鄧小平と金日成がほぼ時を同じくして逝った場合、北京と平壤の権力にはマインスの相乗効果を発揮して、少なくとも両国の社会主義体制はソ連・東欧同様、崩壊するだろう。社会主義体制ばかりでなく、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）は消滅し、中華人民共和国（中国）は四分五裂する可能性が高いのだ。それはまさに、八〇年前の李朝と清朝の連鎖的滅亡の再現にも等しい激変である。

ただ、当時と今との違いは、二十世紀末の今日、屍に群がるハイエナのような帝国主義列強はもはや存在せず、朝鮮半島の南半分には新興工業国家に成長した韓国があり、台湾海峡の向こうには「光復」を狙う国府が存在するということだ。しかも、彼らの「暴走」を抑制し、平和的変革と安定をもたらす要素として、米国の軍事・政治力と日本の経済力が存在するということである。

高坂——「北」が先になったらとんでもない混乱状況になりますよ

小此木——国内条件だけみれば、金日成主席が健在な間はもつてしょうが……

中嶋——中国共産党指導部の中からゴルバチョフやエリツインが出ないとも限らない

こうきかまさたか
高坂正堯



京都大学教授(国際政治学)。1934年生まれ。京都大学法学部卒。著書に『宰相吉田茂』他。

おこのぎまさお
小此木政夫



慶応大学教授(現代朝鮮論)。1945年生まれ。慶応大学法学部卒。著書に『朝鮮戦争』他。

なまじまみれ
中嶋嶺雄



東京外国語大学教授(現代中国学)。1936年生まれ。東京大学法学部卒。著書に『中国の悲劇』他。

ですけれども、はたして韓国に西ドイツのように、北朝鮮を引き受ける能力があるのか。韓国のある経済機関は統一のコストを二〇〇億〜四〇〇億ドルと試算していますが、その負担に耐えられるだけの経済力が韓国にあるかという疑問です。政治的なコストだって大きい。今でも韓国国内には全羅道と慶尚道の地域対立がある。これに北が加わると古代の新羅・百濟・高句麗の三国時代が復活するようなものです。そのなかで安定したリーダーシップを生みだすことができるかどうか。私はどうも「共倒れ」になる可能性が大きいような気がします。

では「共倒れ」になった場合、誰が助けるのか。アメリカは「いま一つ社会主義政権が崩壊した」と勝利宣言を出せばそれで済むかもしれないけれども、日本はそうはいかない。隣の国ですし、「不幸な過去の歴史」もありますしね。そのあたりが過小評価されすぎているのではないか。

中嶋 昨年夏、モスクワで例の八人組が政権を奪取した時、『人民日報』としては異例の囲み記事で外交部発言が掲載されました。この事件はソ連の国内問題であって、外国が干渉してはならない、中ソ関係はますます発展するであろう、とね。これは鄧小平らの北京の首脳が、いかに八人組に期待し

たかを示すものだと思います。それだけにクーデター政権が三日天下で終わったことは大きな衝撃だったでしょうね。

その後、北京政府は「社会主義の万里の長城を鋼鉄で築け」とさかんにキャンペーンしているのですが、一方で「中国の八人組を打倒せよ」というスローガンがあちこちで出たようです。これは八九年の民主化運動のときのスローガン「八老治国」つまり八人の老人の支配を打倒せよと重なっているのです。

高坂 ソ連と数があつてゐるわけだ。(笑)

中嶋 中国らしい面白い響えだと思います。ともかくあのクーデターに対しては、北京も平壤もハノイも同じような反応を見せた。ですから、現在のソ連の変化が彼らに与えている危機感是非常に深いと考えていいでしょう。

私の考えでは、北京政府はあと数年間、九七年七月一日の香港返還までもつかもたないか、という状況だろうと思います。鄧小平は現在八十七歳ですから、数年後には北京の長老たちは総退場する時期でしょう。つまり八九年の六・四天安門事件を悲劇的な結果に終わらせた革命第一世代の権威と指導力がなくなる、これが一つです。それと経済面においては、中国ではすでに事実上、市場経済になりつつある。今後数年間、改革・開放を唱えれば唱えるほど、沿岸地方から資本主義化していき、香港や台湾の影響もますます大きくなるでしょう。そして三つ目は中国共産党の正統性がほとんど地に落ちていくこと。中国では誰に聞いても共産党は駄目だと

いつていますよ。

小此木さんの意見も伺いたいのですけれども、私は北京・平壤・ハノイのなかでは、平壤が一番もつのではないかと思っているのです。

高坂 私もそんな感じがするな。

中嶋 一つには金日成と鄧小平、すなわち両国の革命第一世代に若干の年齢の差がある。金日成は七十九歳です。その点は意外と大きいのではないかと思います。それと私自身が平壤に行つて感じたことですが、少なくとも表面的には中国ほど労働党の正統性が崩れていない。あの体制は社会主義というよりも、主体思想のもとに金日成という教祖を戴いた宗教国家のようなものです。経済状況は深刻ですけれども、ともかく治まっています。そうすると意外に長く体制を維持していけるかもしれない。

ハノイに関していいますと、高坂さんもおっしゃったようにすでに大きく変化している。それを示す兆候の一つは、九一年十月にカンボジアのヘン・サムリン政権を支えていた人民革命党の臨時大会で、複数政党制と自由主義、市場経済導入に踏み切ることが決議された。そして党名も「革命」を取つて「人民党」にした。ヘン・サムリン政権はご存知のようにベトナムの傀儡政権だったわけですが、ベトナムが対中関係改善などがあつてすぐには旗幟を鮮明にできないうちに、出店のほうが旗を下ろしてしまつたわけですよ。

もう一つ注目すべきことは、ベトナムと台湾が接近して、

台湾の貿易事務所がハノイに設置されました。台湾だけではなく、目立たないうちに東南アジアの華人社会に接近しています。ベトナム難民の大部分は中国系だったのですが、ベトナム経済のかなり大きな部門を占めているのはシロン町の町を中心とする華僑経済です。

これらを勘案しますと、Xデーが来るとすれば、ベトナム、中国、北朝鮮という順序になるのではないかと考えていると思いますね。

高坂 そこには多少願望も入っているのでしようね。つまり、北朝鮮が急激に変化することが、日本にとって一番困ることになるわけだから。

中嶋 願望がなくては国際政治は語れませんからね。(笑)

北朝鮮は台湾に学べるか

小此木 国内条件だけみれば、北朝鮮は金日成主席が健在な間はもつと思います。しかし、外的条件も考慮に入れないといけないでしょう。それによって結論も変わってくるような気がします。

具体的には、核査察の問題があります。なにせブライドの高い国ですから、自分の主張がとまらないかぎり査察は受け入れない、ということになる可能性があると。となると、時間稼ぎを恐れる韓国やアメリカは、IAEA(国際原子力機関)や国連安保理事会で非難決議や制裁決議を提出することにな

るでしょう。これは下手をするとイラクのケースに発展しかねません。物理的な力が行使される可能性はともかく、経済制裁だけでも深刻な影響があるでしょう。そうなると二、三年という短いタイムで大きな変化が起こる可能性だって出てくる。早い話が日朝交渉は進まないでしょう。

高坂 それは間違いない。

小此木 日朝交渉がまとまらないかぎり、北朝鮮経済は再起不能なんですから、出口なしという状況になっていくわけですね。そのような状態のもとでは、いかに結束力の強い体制とはいえ、外部から本気で潰しにかかったときに、耐えられるかどうか。

ただ、そのような極端なシナリオを想定しないかぎり、そう急激な変化は期待できないこともたしかです。一九七〇年代前半までの北朝鮮はスターリン・モデルで解釈できる国家だった。しかし金日成主席が還暦を迎えたところから、スターリン・モデルよりも王朝国家、あるいは宗教国家モデルのほうの説明しやすくなりましたね。これを一九三〇年代の日本の天皇制と比較してみるとよくわかる。日本が戦後民主主義体制に移行できたのは、敗戦という物理的条件があったからです。

ですから北朝鮮の現体制もよほど強い物理的な力が外から加わらないかぎり、そう簡単に崩壊するとは思えない。宗教団体には、外から圧力をかけられると逆に内部的には結束が強まる側面もあります。

中嶋 まさにおっしゃるとおりです。たしかに北朝鮮も出発点ではスターリン・モデル、あるいはコミニズムの一派独裁から始まったけれども、意外に早い時期に彼らはその限界に気づいたのかもしれないですね。そしてそれに代わるものが金日成神格化とともに出てきた主体思想だと思っています。私はキューバも含めてほとんどの社会主義国に行きましたが、そのなかでも北朝鮮はえも言われぬ異様な国ですね。コミニズムの独裁体制というだけなら他にもありますが、北朝鮮にはなにか精神主義というか、新興宗教的色彩が強いです。それと私が当地で感じたのは、儒教的な家父長体制ですね。いわばレーニンの組織論と儒教的家父長体制が結びついている。ですから、あの親子の権力継承というのは私たちから見るとけしからんということになるけれども、彼らから見ればあの国は金王朝なのです。息子の金正日が父親の権力を家督相続するのは当然なんです。

北朝鮮のイデオロギー担当書記の黄長燁、この人は金日成総合大学の学長も長くつとめた最高のインテリで、漢学、儒学の素養があつて日本語の達者な人ですが、彼と話し合ったことがあるんです。そのときあえて挑発的に、北朝鮮がルーマニアと同じ結末を避けるためには、台湾と同じ道を進むしかない、と言ったんです。すると彼はとても真剣にそれを聞いてくれた。われわれは現在の台湾を褒めてますけれども、二十年前くらい前までは蒋介石の独裁体制だったわけですよ。

高坂 まさに家父長体制だったね。

中嶋 その蒋介石の権力を息子の蔣経国が継承したのですからね。それが蔣経国が亡くなると、本省人の改革派である李登輝が総統の座についた。独裁体制から権威主義体制、そして民主体制へと移行したわけです。北朝鮮が悲惨な結末を避けるためには、台湾に学ぶしかないんじゃないかと思えます。ただ、問題なのは、蔣経国は大変な器の人物でしたが、金正日に蔣経国ほどの器量があるかどうか、非常に疑問ですね。

高坂 台湾の場合、かなり偶然が加わっているらしい。私の学生が研究しているのですが、簡単にいうと、台湾の政治は内戦のあと大陸から渡ってきた外省人が台湾政治の実権を握って離さない。しかし彼らは政治は把握したけれども経済のことはやらなかったらしいですね。おまけに官僚制がなかったから統制することもできなかった。そんななかで中小企業がたくさん出てきて、それが台湾経済を発展させたわけですよ。

中嶋 本省人が社会的に上昇するには、経済でゆく以外に道はなかったわけですよ。広東省だってそうですよ。もともとそこは中国での革命の発源地とはいえず、かなり貧しい地域だった。それが、改革・開放政策でお金を儲けてもいいということになった。そこで起業家精神が生まれ、あつという間に資本主義化した。彼らは香港に学んだわけですがね。

小此木 現在の北朝鮮が置かれている環境は、高度経済成長以前の韓国や台湾のそれと近いような気がしますね。つまり、このままでは相手方との経済格差が耐えがたいところまで開いてしまう。軍事的にも対抗できなくなる。こういう状況のなかで生き残るためには、まず外部から資本と技術を導入して経済を再建し、発展させていくしかない。

そこで北朝鮮が経済発展のモデルをどこに求めるかということですが、私はむしろ朴正熙モデルではないかと思っています。彼は一九六一年にクーデターで政権をとった。そのころは経済的にも軍事的にも北朝鮮のほうが優位にあったわけです。そこで彼がまずやったことは日韓国交正常化です。そして日本から技術と資本を導入しインフラを整えた。ベトナム特需を利用しながら、市場を南ベトナムとアメリカに求めた。そして七〇年代には重工業化の時代を迎えたわけです。金日成も同じことを考えているのではないか。

しかし、問題なのは、あのころの韓国には一種の起業家精神があり、それが韓国経済を発展させる原動力になったことです。そうした起業家精神が国营企業に慣れた北朝鮮にあるのかどうか。それと市場の問題。南と対抗するだけの発展を望むとすれば輸出志向型の開放経済しかない。とすればどこに市場を求めるのか。本当に経済を開放できるのか。これが大きな問題として出てくるのではないかと思いますね。

高坂 私は北朝鮮の変革はだいたい遅くなると思いますが、そ

の一つの理由としてテレビの問題がある。統一前の東ドイツでは、西のテレビが見られた。パルト三国だってフィッランドのテレビは全部入っていた。西側の情報が入ることによって政府がいくら真実を隠そうとしても、みんなわかってしまうわけです。昨年のソ連のクーデターの失敗を見てもわかるように、情報閉鎖空間をつくらないかぎり、独裁は不可能なんです。しかし北朝鮮では韓国のテレビは見られないんでしょう。

中嶋 中国でいうと、広東省では香港のテレビがもう自由に入ります。だから『人民日報』が、たとえばソ連のクーデター失敗を懸命に隠そうとしても、全部わかってしまうんです。しかし平壤では、実験してみたのですけれども韓国の放送はおろか、日本語放送だって入りません。日本語放送のときにはザーッと雑音が入るんです。NHKの英語放送だけは入るんですね。つまり日本語にくらべて英語のできる人はほんの少ししかいないんですよ。ただ最近、北朝鮮もインテルサットの通信衛星を使うことになった。民衆レベルではないにしろ、政府当局は西側の情報空間に参加したわけです。そうしたことを徐々にでもやっていくと、あるいは早い段階で変化が起ることになるかもしれません。

ただ現段階では北朝鮮が異様な閉鎖空間におかれていることは事実です。北朝鮮に行くと、いかにも社会主義国なんです。別世界に來たという実感がわきます。中国だと広東省

なんて香港とあまり変わらなくなってきた。それにくらべると北朝鮮は背筋を正さないといけないというか、朝の冷気のような凜々しさを感じるんです。

小此木 ノスタルジーですね。(笑)

中嶋 だから金丸さんのような、日本人はだらけていると思っ
ている人が、平壤のマスゲームに感激する気持ちはわから
なくもないですね。

第二のゴルバチョフ、エリツィンが出る可能性

小此木 昨年十月に北京から上海に回って見たのですが、
上海などは外見上は資本主義国と変わらないですね。そこで
考えたのは、中国は天安門事件以来、社会主義の堅持をスロ
ーガンとして掲げているけれども、しかし彼らは本音の部分
では、いつまでも社会主義で国民を納得させられるものでは
ない、政権の正統性とは経済発展でしかない、ということに
もう気付いているんじゃないかということです。経済発展も
できない社会主義は本当の社会主義ではない、といった発言
が指導者層からも出てきているわけですからね。

ですから、社会主義は堅持しつつも、すでに権威主義的な
開発独裁にシフトしはじめているのではないか、という印象
を持ったのですが。中嶋さんはいかがですか？

中嶋 おっしゃるとおりですね。もしそうだとすると、いま

の体制のままで漸進的に変化することもありえます。

ただ、私にはそうばかりとも思えないんです。というのは
いまの中国ではあまりにも政治的自由が抑圧されています。

一般の人民は県レベルの人民大会代表、つまりせいぜい町内
会の会長さんを選ぶ程度のことしか政治参加が許されていな
いわけでしょう。その一方で経済が発展するにつれて、政治
参加への欲求といえますか、一種の市民社会的な成熟がかな
らず出てきます。八九年のあの天安門広場に集まった学生た
ちや知識人の意識はその点で非常に高かったと思います。一
九一九年の五・四運動以上といってもいい。なにしろ、従来
の事大主義と中華思想を転覆させないかぎり中国の近代化は
ありえない、と中国人自身が言い始めたわけですから。もう漢
民族だけの自由ではだめだ、チベットの現状を直視せよ、と
かね。

高坂 ええこと言うじゃないですか。

中嶋 もっとも別の意見もあるんです。中国の人口は八〇
パーセントが農民であって、天安門広場に集まったのは市民
のなかでもほんの少数の知識人と学生だけだったと。たしか
に八〇パーセントの農民がぜんぶ市民社会的意識に基づいて
近代化するというのは、百年河清を俟つような夢のような話
です。しかし革命とか政権の転換は常に都市において起こっ
ているでしょう。フランス革命やロシア革命だって都市にお
ける少数派が革命を成功させたわけですからね。昨年のソ連

の政変だつてモスクワやレニングラードでは凄かつたけれども、中央アジアやロシア共和国の辺境においては何も起こっていない。にもかかわらずあれだけの変化が起こつた。

天安門のときにも、かりに趙紫陽が鄧小平や李鵬を軟禁してしまつたら、あのまま一気にソ連・東欧に先駆けて民主化したかもしれない。ですから、かなりドラスティックな形で変革が起こる可能性も否定できないと私は思います。

高坂 しかし北京の指導部は、あくまでも経済と政治を分けて、政治だけは手放すまいとしているのでしよう。

中嶋 だから中国の場合は、幸か不幸か鄧小平の寿命にすべてがかかつているといえるでしょう。もし趙紫陽や胡耀邦が健在だったら、かならずゴルバチョフやエリツインのような存在になつたと思います。ゴルバチョフやエリツインだつてもとをただせばバリバリの共産黨員だつたわけですからね。

だから鄧小平なき後、中国の現指導部のなから第二、第三の趙紫陽や胡耀邦が登場しないという保証はない。具体的に名前を挙げれば、朱鎔基とか李瑞環、鄧家華、葉劍英の息子の葉選平といった人たちです。私たちでも趙紫陽があとこまていくとは思わなかつたわけですからね。大きな変動の時代を迎えて中国共産党のなから本格的な改革の、つまりカウンター・レヴォリュション・リーダーが登場する可能性も否定できません。

小此木 ヨーロッパで社会主義が崩壊して、なぜアジアに残

っているかを考えると、革命第一世代が生き残っているというのはたしかに大きい。とくにアジアの場合、社会主義が素朴なナショナリズムと結びついて、それを政権がうまく利用している面がありますしね。

高坂 トインビーが言つてますけど、アジアにとってなぜ共産主義がナショナリズムと結びついたかというところ、共産主義とは、西洋の思想を借りて近代化し、しかも西洋の上をいくという知的満足感を与えたものだったと説明します。

しかし北朝鮮ではそれが続くでしょうけれども、中国ではだめでしょうね。中国くらい大きくなると、ひと口に中国人といつたつてさまざまでしょう。人口一二億のなかには、漢民族もいれば、トルコ系やチベット系もいる、それを一党独裁で抑えること自体が無理になつてくるのではないですか。

中嶋 非常に貴重なご意見だと思います。中国は再び分裂と統合のせめぎあひの時代になるでしょう。現にそういう傾向は現われています。たとえば昨年にはウランバートルで初めて内蒙古におけるモンゴル人抑圧を批判する声が上がりました。外蒙古と内蒙古の連帯などというのは、日本が戦前、汎モンゴリズムで満蒙独立を画策して以来のことです。新疆ウイグル自治区でもソ連の変化とともにトルコ系住民のイスラム化が進んで、漢民族に対する反発が強くなっています。チベットはご承知のとおり状況です。ですから、中国内部でも言語圏に合わせて、台湾人は台湾人として、また上海は

上海人、広東人は広東人といったアイデンティティ意識が現われてくるのではないでしょう。

その意味では、中国は四千年来、共産党政権にいたるまで続いた中華思想を脱皮して、新しい中国になるかならないかという実験が始まっているような気がする。逆にそれをやらないことには、中国社会の近代化なんてとても無理だと思えます。

小此木 中国が求心力を失うというのはなかなかイメージがわかないのですけれども、それは群雄割拠の状態になるということです。

中嶋 いまは群雄割拠で内戦という時代ではないですが、各地域ごとに自立性を高めていくことになるでしょうね。

高坂 もともとソ連型共産主義というのは一九二〇～三〇年代モデルの中央集権的なものでしょう。しかし中国では毛沢東のいわゆる「農村から都市を解放した」というようなゲリラ戦モデルです。経済改革がやりやすかったのは、案外そういうことにも原因があるでしょう。政治面となると問題でしょうけれどもね。

中嶋 昨年十一月にソウルでAPEC（アジア・太平洋閣僚会議）が開催され、中国、香港、台湾と三つの中国が参加しました。あれは非常に画期的なことですよ。というのは貿易総額だけみれば三つともほぼ同じなんです。台湾が一三〇〇億元、香港が一四〇〇億元、中国が二二〇〇億元くらい。こ

れを人口比でみると、二〇〇〇万、六〇〇万、一二億と非常にちがはぐな比率になる。にもかかわらず貿易総額はほぼ同じというので、APECでは同等に扱われたわけです。ですから、私は今後の中国は一国兩制ではなくて、一国多政府という状態になっていくのではないかと思います。

目を放せない香港返還

小此木 話は変わりますが、もし北朝鮮の核査察と同じような問題が中国にあるとすれば、台湾問題じゃないかと思えます。冷戦の終結や民主化の進展で、台湾内部にある独立のエネルギーが表面化しています。野党の民進党などは台湾独立をはっきりとうたいあげているわけです。そうした勢力が力を持ち始めて、中国が黙認できない状況になる可能性が高いと思うんですよ。もしそこで武力行使などという事態になると、現在の中国が求めている安定的な国際秩序や経済発展は根底から崩れてしまいます。これも最悪のシナリオですけれども、いずれにせよ一度は軍事的な緊張が高まるのではないかという気がします。

中嶋 可能性としては否定できないですね。この間、大陸への前線基地のある金門島にいつてきたのですが、そこから大陸まで二四〇〇メートルしかない。引き潮のときは二〇〇メートル、ほんとうに近いんですよ。その地下坑道を見せ

てもらったのですが、自動車が二台入るような道があつて、最大収容兵力二五万人だそうです。北京でも毛沢東時代にソ連の侵攻に備えて防空壕を掘ったりしましたが、金門島に比べれば月とスッポンです。外に出ればのどかな田園風景なんですがね。

だからいざ大陸から攻めてきたとしても、台湾はそう簡単には手を上げないと思いますよ。第一、大陸側の軍のほう在北京の司令部どおり動くかどうか。対岸の福建省の人たちのあいだにはすでに台湾信仰が生まれていますし、むしろその余波で北京政府が崩壊する可能性のほうが高いと思います。

高坂 武力行使があるとすれば、私はむしろ香港だという気がする。台湾より地続きではるかに攻めやすいですね。しかし、その場合問題になるのは、香港では今「港人治港」というスローガンがありますね。香港は香港人の手で、という意味です。昨年行なわれた選挙で、一八の議席のうち一五を自治派がとつたでしょう。もつとも選挙で選ばれたのは六〇議席のうちの一八で、あとは上からの任命でしたがね。ちょうど八九年のポーランドの制限選挙のときに「連帯」が議席を確保して、それが東欧変革の口火を切ることになったのと同じように、香港もそうならないとはかぎらない。九七年の返還までに香港人による自治が実現する可能性は高いと思います。

中嶋 天安門事件のときも、二〇〇万人のデモがありましたし

た。従来、政治に関心の低い香港人の三人に一人がデモに参加したわけですからね。

高坂 香港返還によって皆出ていくなどといわれてますけれども、出ていくのはよほどの金持ちだけで、中産階級は残るわけですよ。だから懸命に自治運動を続けるでしょう。

中嶋 そういう状況のなかで、香港の返還協定そのものが問われることになるかもしれませんね。あれは香港住民の民意ではなく、鄧小平とサッチャーが彼らの頭越しに取り決めたことです。しかし世界の大勢が民意重視に流れていくなかで、かりに中国が武力行使を行なったとしたら、それこそ天安門以上の国際社会の批判にさらされるわけですから、そう簡単にはできるものではない。中国は内政不干渉を唱えるでしょうけれども、もうそれもできない。ソ連政変の際にブッシュ大統領は八人組にはなんの正統性もないと強く明言しましたが、あれだってある意味では内政干渉ですからね。

高坂 百年前だったら明白な内政干渉です。

中嶋 ですから、そう簡単に武力行使に出るとは思えない。

高坂 だとしたら香港では自治が始まりますね。

中嶋 そうです。そしてやがては広州全体が香港化することになるでしょう。

小此木 台湾と同じです。

中嶋 対岸の福建省にしても厦門アモイなんかは台湾の投資を期待すること大ですよ。ただ、今のところは大規模な投資は台湾

のほうで待ったをかけています。あまり急激に行なうとリアクションが大きすぎるということだね。賢明な判断だと思えますが、小さなところでは、どんどん台湾資本が入っている。

高坂 香港や台湾のいわゆる華僑の妻は儲かることにしか投資しないことです。逆に日本人は儲からない国営企業にばかり投資するんですね。

中嶋 そうです。日本資本と台湾・香港資本がある種の分業を行なっているかたちになっています。また日本の資本がなかなか入りこめないこともたしかなんです。華僑のネットワークがありますし、大陸から見ると日本もアメリカも所詮は同じ外部なんです。それにくらべると香港・台湾はわが同胞なんですから。

最近もこういう話がありました。日本のある商社が北京政府筋の依頼を受けて住宅を開発した。たしかに北京は一時、住宅不足でした。ところが、日本企業がつくった宿舍は、一カ月の家賃が日本円で数十万円するんです。たしかに3DKよりももっと大きなサイズではありますが、北京でそんな家賃が払えるのは日本人しかいない(笑)。それでせっかく建てた宿舍のうち半分は空き家です。華僑だったらそんな馬鹿な商売は絶対にやらないですよ。

高坂 まあ、儲かる商売は華僑に回して、日本は損な役まわりをやっておればええのかもしれないけれどもね。

中嶋 それが日本が戦前やったことへの贖罪になるのかもしれない。

れません。

「北」は、「南」と日本のどちらを選ぶか

小此木 中国の話がうかがっていますと、北朝鮮も早く国際社会に引き込んで、外資を入れて経済発展させる、そうやって徐々に外部の情報を入れるしかないように思えますね。

高坂 しかし具体的にどうやってそれをするか。中国の場合は儲かるところに投資してくれる台湾や香港の華僑がいるでしょう。北朝鮮はそれなしでやるわけですから。

小此木 中国と同じように、日本が儲からない部分に投資するしかないんじゃないでしょうか。

高坂 気が重いね。

小此木 しかし、それしかないような気がしますね。つまりは時間稼ぎです。日本からの経済協力で十年間は北の体制を支える。その間に韓国の経済も発展するでしょうし、大統領選挙も三回あるわけですから、民主化や政治的安定も達成されるでしょう。そうなれば、たとえ北が急激に崩壊しても、西ドイツのように吸収統合できるのではないですか。

中嶋 北朝鮮の人と話していると、早く日本やアメリカと接触したいという感情があります。ある意味では金丸訪朝がなくても第十八富士山丸問題は解決したのではないかという気がします。ともかく日本が北との間にチャンネルを作っ

て、シナリオを考えていくことは必要でしょうね。

それともう一つ考えなければならぬのは、韓国が北に対してそうした働きかけをすることです。われわれはなんとか韓国と北朝鮮が宿命的に対立していることを前提に話しているけれども、朝鮮ナショナルリズムというか半島統一は彼らの悲願です。現に韓国の若者たちが平壤に対して抱いている見方は、われわれとはずいぶん違うんですよ。そういう状況のなかで、日本よりも先に韓国のほうからそうしたシナリオを提供し、北もそれを受けて、統一以前に経済交流を行なう可能性はある。実際、「現代」の社長が平壤に行きましたし、そうした交流がレギュラーな形で進むかもしれない。

小此木 韓国の人も日本がするよりも自分たちが働きかけたいと言ってます。北との経済協力も積極的になつていきますね。ただ、北側から見て南と和解するのと日本と和解するのとどちらを選ぶかということになりますと、やはりまず日本と和解して経済を再建し、南と競争的に共存していこうということになるでしょう。ただし、日朝関係が正常化すれば、結局それが南北交流を促進することになると思います。国交正常化となれば日本から資金や技術が入ってくる。韓国の経済力も利用しない手はないと北は考えるでしょうし、しかも韓国はなんとか北に入りこもうと努力しているわけですから。

高坂 ただそこで問題なのは、さきほどおっしゃった朝鮮半

島のナショナルリズムです。南北統一が成ったとしたら、たしかイギリスやフランスよりも人口が多くなるのではないですか……。

小此木 合わせて七〇〇〇万人近いですね。

高坂 そうでしょう。国際社会のなかでは大国になるんですよ。それに韓国には、日本のようなけな大蔵省がありませんからね。きつと経済協力となると、オーバークミットする結果になると思います。となると日本は韓国の尻拭いをすることになるのではないですか。まあ、それが一番いい形なのかもしれません。

中嶋 でも、韓国は台湾などに比べるとまだ経済の足腰が弱いです。

小此木 にもかかわらず能力以上のことをやろうとする傾向がある。台湾には思いもつかないような……。

中嶋 北も南も派手好きな国ですからね。

小此木 たしかにその点でいえば韓国と台湾は対照的です。ね。

中嶋 台湾はどちらかというと気がついたところまでよくなっていたという感じでしょう。だから大陸に対しても慎重なんです。それに比べると韓国はまず旗を振ることから始めてしまふ。それともう一つ不安なのは、半島統一となるとドイツ型しかないわけです。東西ドイツはたしか国力が四対一くらい……。

高坂 もっとあったでしょう。九対一くらい。

中嶋 韓国と北朝鮮にそこまでの格差はないでしょう。経済格差だけでなく、人口とか面積、軍事力まで含めた国力ということになる。

小此木 そうですね。経済格差だけが突出している。

中嶋 とすると、韓国が北をすべて吸収合併というわけにもいかないでしょう。そこが問題です。

革命第一世代が退場するとき

高坂 朝鮮半島の南北統一についても少し言いますと、ドイツ統一の場合はアデナウアーが西側諸国と組んでやった「力の政策」が大きかったわけでしょう。その点、韓国が日本と組んで政策を行なえるかという点、過去の経緯もあって難しいような気がします。

小此木 日本に頼ることに対しては抵抗があるでしょうね。

理想的なのは「2+4」合意、つまり南北間で国家連合を形成し、それを日・米・中・ソの周辺四カ国がサポートする形でしよう。ベーカー国務長官もそのようなことを言っています。しかし韓国ではベーカー発言に対して反発が出ているんです。韓国が主張しているのは「2+2+2」なんです。最初の「2」は南北朝鮮、次がアメリカと中国、つまり朝鮮戦争の当事国です。のこりの「2」が周辺国の日本とソ連。つ

まり最後の「2」はコミットする合理的な根拠がないということなんです。

中嶋 やはり日本は嫌われ者なんです。この間、私は香港で「香港の将来」をテーマとした国際会議に出席したのですが、最後のバネル・デイスカッションで話題になったのは香港とアメリカとの関係とか、香港とカナダ、香港とオーストラリアばかりで、香港と日本の関係なんて出てこない。実際問題としては香港経済に対する日本の影響力は群を抜いているのです。にもかかわらず日本が話題にならないのは、香港の将来に関して日本には口出しされたくない、というのが彼らの本音なんです。戦争中のこともあって、反日感情は根強いものがあるのです。韓国も同じじゃないですか。

小此木 おっしゃるとおりですが、私は韓国の人にそう言われるところ反論するのです。このまま日本が北朝鮮と国交を樹立するとなると、日本は朝鮮半島の南北双方に大きな経済的影響力を持つようになる。一方、ソ連や中国にはそうした影響力は期待できない、アメリカにしても安全保障面に傾斜するだろう、となるとむしろ日本が南北統一にオーバークミットすることになりはしないか。だから「2+4」にしたほうが日本の影響力が四分の一に収まるのではないかと。中嶋 たしかに韓国も香港も中国も、日本を排除することによって、かえって関係が強くなっていますね。

高坂 感情面では納得できますけれども、もっと冷静に国策

を考えてくれるといいんでしょね。その点で台湾は賢い。独立に関して台湾がどの程度我慢するかというのはアジアの秩序を考える場合、大きなファクターです。だいたい人口二〇〇〇万人の国家が国として認められないなんて、現在の国際世界における一大奇観ですよ。それを彼らは我慢しているわけですから。

中嶋 貿易総額からいっても間もなく世界のベストテン入りしようとしていますし、外貨準備高は世界で一、二位です。その台湾を存在しないかのように扱ってきた日本の態度も問題ですよ。

だから今後は二十年目を迎える日中国交のマイナスをいかに是正するか、すなわち中国を刺激せずに台湾を現実の国際社会に迎え入れるか知恵を絞ることが課題になるでしょうね。

高坂 実際問題として四つの中国が存在している。大陸、香港、台湾、そして世界各地の華人社会。だから中国の指導者が「一つの中国」という神話を捨てられるかどうか、これはアジアの将来にとって大きな問題ですよ。

中嶋 いま、鄧小平をはじめ保守派の長老たちの権威は地に墜ちています。鄧小平が天安門の前後に胡耀邦や趙紫陽を解任しなければ、毛沢東を超えるカリスマになりえたのでしょうけれども、そうならなかった。だから彼らが退場して重しがとれたときには、中華人民共和国は危なくなるでしょうね。

共産党独裁が崩壊してソ連のような緩やかな国家連合が形成される、そこまでいくのではないでしょうか。

小此木 その点、北朝鮮はさきほど言いましたように新興王朝なんです。その創始者たる金日成が亡くなれば国民は嘆き悲しむと思う。いわば日本近代化の象徴である明治天皇が亡くなったときと同じ衝撃があるのではないですか。そしてその衝撃が収まったころ、二代目が先帝ほど英明かつ有徳の人物かどうかという不安感が出てくるでしょう。だから金日成としては、彼が生きているうちに南北の共存関係を作っておかないと、あらゆる困難な問題が息子の金正日に引き継がれることになる。

高坂 とにかく中国、北朝鮮の「その日」についていえば、どちらが先にくるかが一番問題でしょうね。北が先になったとして、北朝鮮がルーマニアと同じ道を辿るなんていう人がいるけれども、それはありえませんか。そうなれば中国が介入してくるかもしれない。一部の外電によると、昨年のソ連政変に対しても、クーデター政権が危なくなったら介入しようとした動きがあったといえます。

だから北が先になったらとんでもない混乱状況になります。だからわれわれとしては、中国、北朝鮮の順番であってほしいと祈るしかないでしょう。中嶋さんもおっしゃったように、国際政治の専門家なんて、たいがい所詮は祈禱師ではないわけですからね。(笑)

特集 平壤と北京の「その日」はいつか

私はこう見る

中国の一方支配の崩壊は

来世紀の話

わたなべとしお
渡辺利夫

(東京工業大学教授)



否定的に扱われた、あのベトナム戦争時の報道の繰り返しはもうごめんである。ベトナムがベトナム共産党の真正正銘の「傀儡」であったことが当時の党幹部自身から伝えられたあとでも、また南北統一後における南部の「社会主義的改造」が生んだあのおぞましい帰結が誰の目にも明らかになったあとでも、ジャーナリズムはもうそのことに何の興味をも示そうとしない。

「総本山」ソ連共産党の解体が、自由と民主を求める中国人民を鼓舞する一方、中国共産党は自らの一方支配体制の正統性を守るべく、必死の思想的引締めをもつて人民に対峙している、といった構図の描き方をジャーナリズムは好む。しかし、中国共産党一方支配体制には一切の正義は存在せず、これに抗する人民の側に正義のすべてが体現されているかの、ごとき主張は、ただの思い込みにすぎないのではないか。

戦争や革命や反乱が起こるたびごとに対峙する諸勢力を正と邪に二分して、価

值的判断を滔々と述べて何やらしたり顔のジャーナリズムに、私はうんざりである。過剰な表現はジャーナリズムの本性的なものだから致し方ないにしても、仕事の本質は価値的判断ではなくて、情勢判断でなければならぬ。タマのとんでくる気配のない観客席で、勝手な思い込みを、幾分かの優越感を潜ませつつ開陳するといった姿勢は、このあたりでよしにしてもらえないか。

正義を担うのはベトコン(民族解放戦線)であって、南ベトナム政府とこれを支えるアメリカのたちふるまいの一切合財が

プロレタリアート文化大革命の惨たる結果と、さらにはこれに六・四天安門事件が加わって、中国共産党がかつての輝きを失い、国民心理の中に一方支配体制への懸念がじわじわと広がってきたことは確かな事実であろう。しかし、毛沢東の死去のあと復権を果たした現下の共産党指導者が、自らの手によって文化大革命を収束させ、柔軟で大胆な改革・開放路線に転じることによって、かつてであれば信じられないような高成長過程に中国を導いていった、という事実を看過するのは公平ではない。

今日の中国共産党のやり方に対する共